

2022年度 SF入学試験	学部 社会学部	試験科目 小論文(論文Ⅰ)
------------------	------------	------------------

別紙解答用紙に解答すること。「小論文(論文Ⅰ)」・「小論文(論文Ⅱ)」とも必答

図表(1)～(4)は日本の雇用に関する各種の統計データです。これらのデータをもとに以下の問いに答えなさい。

(1)労働力人口と労働力率

(1)-①年齢階級別労働力人口

	(単位万人)		
	15～19歳	20～24歳	25～29歳
1975年	168	651	748
1980年	147	552	662
1985年	151	582	588
1990年	181	653	641
1995年	146	740	717
2000年	132	629	827
2005年	108	526	721
2010年	91	452	633
2015年	100	417	570
2018年	116	468	556
2019年	122	480	558

(出典)総務省「労働力調査(基本集計)」

(注)労働力人口とは、15歳以上人口のうち、就業者と完全失業者を合わせたもの。
労働力率とは、労働力人口の15歳以上人口に占める割合。

(1)-②年齢階級別労働力率

	15～19歳	20～24歳	25～29歳
1975年	21.1	71.1	70.1
1980年	17.9	69.8	72.7
1985年	17	71	75.2
1990年	18	73.4	79
1995年	17	74.1	81.7
2000年	17.5	72.8	83.2
2005年	16.3	69.3	84.4
2010年	15.2	68.3	85.7
2015年	16.4	68.6	86.7
2018年	19.5	74.3	89.2
2019年	20.9	75.4	89.7

(1)-③男女別(15～29歳)

	労働力率	
	男	女
1975年	68.2	44.4
1980年	62	45.8
1985年	59.1	46.7
1990年	59.1	49.8
1995年	63.4	53.4
2000年	65.8	55.6
2005年	62.7	56.3
2010年	61.3	56.2
2015年	60.5	56.1
2018年	62.9	60.4
2019年	63.9	62

(2)大学生就職率

	大学全体	大学・男	大学・女
1975年	74.3	77.5	62.8
1980年	75.3	78.5	65.7
1985年	77.2	78.8	72.4
1990年	81	81	81
1995年	67.1	68.7	63.7
2000年	55.8	55	57.1
2005年	59.7	56.6	64.1
2010年	60.8	56.4	66.6
2015年	72.6	67.8	78.5
2018年	77.1	72.3	82.9
2019年	78	73.2	83.6

(出典)文部科学省「学校基本統計」

(注)各年3月卒業者のうち、就職者の占める割合。

(3)非正規雇用者比率

(3)-①全体

	15～24歳	25～34歳	全体
2002年	29.6	20.5	29.4
2003年	32.1	21.5	30.4
2004年	33.2	23.3	31.4
2005年	34.3	24.4	32.6
2006年	33	25.2	33
2007年	31.2	25.8	33.5
2008年	32.2	25.6	34.1
2009年	29.8	25.7	33.7
2010年	30.5	25.9	34.3
2011年	32.4	26.5	35.1
2012年	31.2	26.5	35.2
2013年	32.3	27.4	36.6
2014年	30.8	28	37.4
2015年	29.7	27.3	37.5
2016年	28.5	26.4	37.5
2017年	27.2	25.9	37.3
2018年	26.3	25	37.9
2019年	26	24.8	38.3

(3)-②男性

	15～24歳	25～34歳	全体
2002年	24.1	9.4	15
2003年	27.6	10.2	15.6
2004年	27.9	11.7	16.3
2005年	29	12.9	17.7
2006年	27.5	13.4	17.9
2007年	26.3	13.8	18.3
2008年	28.6	14.2	19.1
2009年	24.7	13.9	18.3
2010年	24.9	14	18.8
2011年	27.6	15.4	19.8
2012年	26	15.3	19.8
2013年	27.3	16.4	21.2
2014年	25.4	16.9	21.8
2015年	25.3	16.6	21.9
2016年	24.6	15.8	22.1
2017年	23.3	15.3	21.9
2018年	21	14.4	22.2
2019年	21.6	14.6	22.8

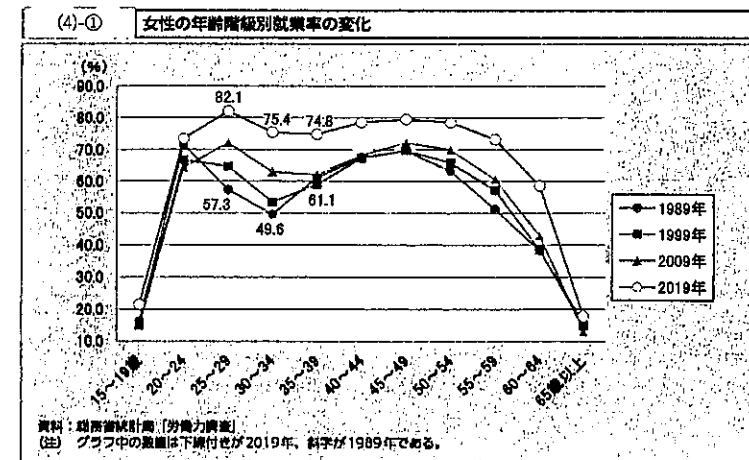
(3)-③女性

	15～24歳	25～34歳	全体
2002年	35.1	36.7	49.3
2003年	37.3	37.8	50.6
2004年	39.3	40.1	51.7
2005年	40	40.7	52.5
2006年	38.8	41.3	52.8
2007年	35.9	42.3	53.5
2008年	35.7	41.3	53.6
2009年	35.2	41.2	53.3
2010年	36	41.4	53.8
2011年	36.9	40.9	54.5
2012年	36.4	40.9	54.5
2013年	37.1	41.4	55.8
2014年	36.2	42.1	56.7
2015年	34.3	40.9	56.3
2016年	33.1	39.5	55.9
2017年	31.1	38.9	55.5
2018年	31.1	37.9	56.1
2019年	29.8	37	56

(出典)総務省「労働力調査(詳細集計)」

(注)ここでいう非正規雇用者比率とは、役員を除く雇用者に占める非正規の職員・従業員の割合のことをいう。
15～24歳は在学生を除く

(4)女性の就業率



2022 年度 S F 入学試験	学部 社会学部	試験科目 小論文(論文 I)
---------------------	------------	-------------------

別紙解答用紙に解答すること。

設問

問 1 図表(1)①、②「年齢階級別労働力人口」と「年齢階級別労働力率」のデータから読み取ることのできる、1975年～2019年の労働力人口の変化と労働力率の変化のそれぞれの特徴について文章で説明しなさい。(配点 5 点)

問 2 図表(1)③「男女別の労働力率」のデータから読み取ることのできる、1975年～2019年の労働力率の変化の男女の違いや特徴について文章で説明しなさい。(配点 5 点)

問 3 図表(2)「大学生の就職率」のデータから読み取ることのできる、1975年～2019年の大学生の就職率の変化の特徴について文章で説明しなさい。また、その変化に影響を与えた 1990 年前後の社会的な状況について知っていることを説明しなさい。(配点 15 点)

問 4 図表(3)「非正規雇用者比率」のデータから読み取ることのできる特徴について説明し、その社会的意味について自分の考えを書きなさい。(配点 10 点)

問 5 図表(4)「女性の年齢階級別就業率の変化」のデータと、図表(1)-③、(2)、(3)-③のデータとを組み合わせ、女性の就業の変化について説明しなさい。(配点 15 点)

以上

別紙解答用紙に解答すること。

「小論文(論文Ⅰ)」・「小論文(論文Ⅱ)」とも必答

次の文章を読んで、問1から問4に解答しなさい。

エチオピアやケニア、ウガンダのエリートランナーの驚異的なパフォーマンスは、「薄い空気」のなせる技だと見なされることが多い。同じく、それは遺伝的に説明できると考える人もいる。(中略) 遺伝や標高がランナーに何らかの優位性を与えるという仮定は、速さの秘訣は「生得的なもの」に起因するという考えを支持するものだ。エチオピアやケニアのランナーは「生まれつき才能がある」と見なされる。これは貧困と結びつけて語られることもある。たとえば、アフリカの貧しい地方で育ったランナーは、幼い頃から“自然な”生活習慣を送っており、それが速さに貢献している、というものだ。小さい頃から野良仕事を手伝ったり、学校までの長い道りを裸足で走って通ったりといったイメージがメディアで強調され、それがチャンピオンランナーを生み出す土壤になっていると考えられている。(中略) アフリカ人選手の長距離走の優れたパフォーマンスをこのように先天的な理由で片付けてしまうことがもたらす悪影響を指摘しておくのは重要だと思う。アフリカのランナーを「努力せずに勝てる」とか「走るために生まれてきた」といった言葉で表現する傾向は、彼らが長い年月をかけてさまざまなことを犠牲にしながら練習に打ち込んでいるという事実を覆い隠し、幻想を生みだしてしまう。

* * * * *

エチオピアでの生活とランニングの経験は、私にランニングに対するはるかに直感的で、創造的かつ冒険的なアプローチの可能性を示してくれた。ケニアのエリウド・キプチョゲがウィーンで一時間五九分四〇秒を記録したのをはじめ、フルマラソンで二時間を切るためのさまざまな挑戦がメディアで報道される中で、欧米の科学者が東アフリカのランニングの“専門家”として脚光を浴び、炭素繊維でコーティングされたシューズや空気力学に基づいたランニングフォームなどの革新的な技術に注目が集まるようになっていく。けれども、あるエチオピア人の若手ランナーに言わせれば、「科学者はタイムを知らず、医者は走らない」。世の中の人たちは、世界のトップレベルのスポーツ選手のパフォーマンスは、スポーツ科学や実験室でのテストに左右されると考えている。しかし、どんな実験室のテストよりも、シンプルなランニングレースのほうが選手の身体的特徴を測定しやすいと認めるスポーツ科学者もいる。エチオピアのランナーにとっても、A地点からB地点までの単純なレース以上に客観的なテストはなく、たくさん走ること以上に優れたランニングを学ぶための方法もない。

* * * * *

エチオピアやケニアのランナーは、高原を裸足で歩いて学校に通う子供たちの姿や、「走

ることによって貧困から抜け出す」というロマンチックなイメージで語られがちだ。だがブノワは、この地域でランナーになるのは最貧困層ではないと断言した。

「ランニングに打ち込むには家族の支援が要るし、練習のための時間と栄養も必要だ」。私はこのことを、ティフランと一緒に森から戻る道すがらの会話でも実感した。そのときたまたま一緒に傍を歩いていた手提げ鞆を持った通勤途中の太った男性が、ティフランにランナーになるための条件を尋ねた。ティフランは指を折って数えながらランナーが成功するために必要なことを挙げていった。まず、「ガイズ（時間）」が必要だ。走るための時間はもちろん、「イレフト」と呼ばれる、次の練習までにしっかりと休養をとるための時間も必要になる。二つ目に、練習を続けるためには十分な量の良質な食事が必要だ。三つ目は「ヤ・スポーツ・マサリヤ」。これは「スポーツ用具」や「施設」という意味だ。ランニングシューズやランニングウェアだけでなく、望ましい練習場所に行くためのバス代も必要になる。ここに来て初めての朝のランニングの時にティフランが話していたように、練習環境は重要だ。こうした費用を捻出できないために、ランニングに本格的に取り組めない人もいる。

これはメディアが描く「シューズすら買えなかったからこそ、苦難に見舞われたからこそ、東アフリカのアスリートは成功をつかみとる」というイメージとはかけ離れている。実際には、こうした経済的な条件が大きな参入障壁となっているのが現実だ。またランナーになれば教育や雇用の機会が得にくくなり、さらには結婚すら難しくなることもある。私はエチオピアでのフィールドワークの初期の段階では、このことを十分に理解していなかった。「ティフランみたいな選手は、仮にランナーとしてうまくいかなかったとしても、人生が台無しになるわけじゃないと思う。だって、彼はいつでも農家に戻れるんだから」と私が言うと、ブノワはかぶりを振った。「ちがうね。二五歳の負け犬が、どうやって妻を見つけるんだ？ランナーは自分の中に何かがあると信じている。だから失敗すれば、失うものはとてつもなく大きい」。

マイケル・クローリー（2021）『ランニング王国を生きる』児島修訳、青土社、より抜粋。

問1：著者は、「アフリカ人選手の長距離走の優れたパフォーマンス」を「先天的な理由で片付けてしまう」ことには悪影響があると述べている。それはどのようなものか、説明せよ。

問2：著者は、「科学者はタイムを知らず、医者には走らない」という言葉を紹介している。この言葉の背後にあるのはどのような見解か、説明せよ。

問3：著者は、「この地域でランナーになるのは最貧困層ではない」という言葉を紹介している。その根拠としてどのような事実が挙げられているのか、説明せよ。

問4：あなたの知っているマラソン以外のスポーツをひとつ挙げ、メディアなどで流布しているイメージと実際の競技のあいだにどのようなギャップがあるか、可能な限り詳細に説明せよ。

以上

両面印刷